

発達障害児に対する参与観察による ソーシャルワーク演習

松 山 郁 夫

Social Work Practice of the Participant Observation for Children with Developmental Disorders

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究では、ソーシャルワーク演習において発達障害児のトレーナーとして参与観察を体験した学生が、発達障害児の状態をどのように捉えるかを検討した。その結果、参与観察を体験した学生は、発達障害児の状態を全体的に捉えようとしていること、自由で安全な雰囲気の中で対象児が適応行為をとっている様子を観察していること、及び遊びの様子、障害特性、子供らしい面の各視点から広く状態を捉えていることが考察された。

Key words : 発達障害児、運動教室、学生トレーナー、参与観察、ソーシャルワーク演習

1. はじめに

現在、社会福祉士受験資格取得のための必修科目の一つで、150時間の受講を要する相談援助演習（ソーシャルワークに関する演習であるため、以下、「ソーシャルワーク演習」と記述する）において、援助場面を想定した要援護状態にある対象に関する実際的な演習をすることが求められている。

2005年4月に発達障害者支援法が施行され、発達障害への関心は高まっているが、その障害特性を理解して接することには難しさがある¹⁾。依然として発達障害児とその家族には、地域で健やかに生活をするために必要な支援を十分に受けられない状況がある。このため、2007年度に佐賀大学文化教育学部において発達障害児の運動教室（通称：ウルトラマンクラブ）を開始し、運動遊びを通して心身の健全育成を図る取り組みを継続している。また、ソーシャルワーク演習では、運動教室でトレーナーとして発達障害児を支援する体験を通して、学生が発達障害児に対する理解と支援に関する知見を深める取り組みをしている。

運動教室の参加対象は主に発達障害のある幼児と小学生であるが、その兄弟姉妹も自由に参加できるようにしている。現在、佐賀大学本庄キャンパスの体育館で、月2回、一回当たり1時間半程度実施してい

る。毎回10～15名程度の参加があり、対象児はアスペルガー症候群、広汎性発達障害、自閉症、注意欠陥多動性障害等の発達障害を有している。

初回参加時に親から聴取した対象児の状態として、身体運動に不器用さがあること、集団活動や集団での運動が苦手であること、及びコミュニケーションをとるのが苦手なこと等が共通している。主体的「遊び」が子供の成長の根源的エネルギーとなるとされている²⁾。このため、ウルトラマンクラブでは、対象児の自主性を尊重した運動遊びを行うようにしている。

エアボール、ディスクゲッター、ドッジビー、輪投げ、インディアカ、ティーボール、ドレミマット、魚釣り、バランス平均台（安全な高さでかなり軽量なスポンジ製の平均台）、リングテニス（リングを投げてやりとりをする）、フリンゴ（クロスをかけてピンポン球程度の大きさのボールを打ち合うゲーム）、フラットボール（折りたたんでディスク状にしたボールで、わずかなショックでボールに変化する）、ザーツ（ターゲットに投げるザーツや、相手のハンドターゲットに投げるキャッチザーツという、目標に向かって投げるダーツの様な遊び）等の運動用具やレクリエーション用具を用意し、対象児が自分で選択した運動遊びを楽しめるようにしている。

運動教室後トレーナーとして発達障害児に接した学生が記述した自由筆記の感想を検討した結果、「対象児と関わりのある周辺にも目を向け、多様な視点から発達障害児とその周囲を広く見ようとしている」、「運動教室が発達障害児に対してどのような点で効果があるのかを捉えようとしている」、「障害よりも人間性を捉えようとしている」、及び「子供の状態を把握した上で自己覚知がなされている」、以上が考察されている³⁾。

これらは、学生がトレーナーとして発達障害児と一緒に遊ぶ体験を通して得られたことで、発達障害児に対する理解が深まったことを示している⁴⁾。発達障害児に対するトレーナー体験が、その障害特性だけでなく子供らしい面を捉えようとするようにも作用する。このため、本研究の目的は、ソーシャルワーク演習においてトレーナーとして参与観察をした学生が、発達障害児の状態をどのように捉えているのかを検討することとする。

2. 研究方法

2011年度にソーシャルワーク演習を受講する学生が運動教室で、発達障害児に対する理解を深め、自発性や社会適応力を高める支援の仕方を学ぶことを目標に、トレーナーとして接する体験をする演習を行った。ソーシャルワーク演習として実施した5名の学生に、2回のウルトラマンクラブにおいて幼児と小学生の対象児のうち8名に対する参与観察を行ってもらった。その後、「よく接した子供の遊びの様子」、「障害特性と考えられるところ」、及び「子供らしいと考えられるところ」の3つの視点から、気がついたことをすべて箇条書きで記録を書くように教示した。記録された内容を対人、行動、及び言語の3つに分類し、全てを表に整理し、トレーナーとして接した対象児をどのように捉えているのかを検討した。

なお、倫理的配慮として事前に参加した学生が行った演習後に書いてもらった記録をソーシャルワークに関する研究に使用することがあるが、個人のプライバシーは保護されること、記録に関する授業成績への影響はないことを説明し、同意を得ている。

3. 結 果

発達障害児に対する学生トレーナーの参与観察による「よく接した子供の遊びの様子」、「障害特性と考

えられるところ」、「子供らしいと考えられるところ」の各視点からの記録を、対人、行動、及び言語の3つの内容ごとに分類した（表1）。

「よく接した子供の遊びの様子」の42個の記述については、対人に関して14個（33.3%）、行動に関して23個（54.8%）、言語に関して5個（11.9%）に分類された。対人に関しては、遊びに誘うと頷くこと、トレーナーに遊びを求めること、及び他児と一緒に遊ぶこと等、周囲の大人や子供との関わりについての記述が多かった。行動に関しては、遊具を使った遊びや運動をしている様子等、遊びの内容についての記述が多かった。言語に関しては、話しかけに応じた発語に関する記述であった。

「障害特性と考えられるところ」の40個の記述については、対人に関して11個（27.5%）、行動に関して24個（60.0%）、言語に関して5個（12.5%）に分類された。対人に関しては、他者と視線を合わせようとしない、他児と遊ぶことが少ない等、周囲の大人や子供との関わりが少ないとの記述が多かった。行動に関しては、多動が目立つこと、注意が持続しないこと、こだわりがあること等、不適応行動についての記述が多かった。言語に関しては、発語が少ない、おうむ返しがある等、発語に問題があると記述されていた。

「子供らしいと考えられるところ」の42個の記述については、対人に関して18個（42.9%）、行動に関して21個（50.0%）、言語に関して3個（7.1%）に分類された。対人に関しては、他児の行動に関心があること、トレーナーや他児との交流があること等、周囲の大人や子供との関わりが見られるとの記述が多かった。行動に関しては、遊びに熱中していること、楽しく遊んでいること、上手に運動を行っていること等、適応行動がとれていることに関する記述が多かった。言語に関しては、言葉で意思や感情を伝えることができる等が記述されていた。

表1 学生トレーナーによる対象児の観察記録

対象	よく接した子供の遊びの様子	障害特性と考えられるところ	子供らしいと考えられるところ
ケ I ス A	対人 <ul style="list-style-type: none"> ・トレーナーが魚釣りの道具を使って遊んでいる様子を隣で見ている。「一緒にする？」と尋ねると小さく頷く。 ・他児に自分が狙っていた魚を取られたときに悔しそうな表情をするが、何も言わない。 行動 <ul style="list-style-type: none"> ・他児が遊びに加わると、よそよそしくなる。 ・魚釣りの遊びを始めると熱中し、釣れると徐々に笑顔も多くなる。 言語 <ul style="list-style-type: none"> ・最後に「楽しかった？」と聞くと「うん」と言って頷く。 	対人 <ul style="list-style-type: none"> ・最初に会ったときは目を合わせようとしない。 ・話しかけても頷いたりするだけで言葉を発しない。 ・打ち解けるのに時間がかかる。 ・積極的にコミュニケーションを取ることができない。 行動 <ul style="list-style-type: none"> ・他児が近くにいると、少し活気がなくなりおとなしくなる。 ・一つのことに集中し、あまり他のことには目を向けない。 言語 <ul style="list-style-type: none"> ・言葉を発することが少ない。 	対人 <ul style="list-style-type: none"> ・他児がしていることに興味を持つ。 ・上手いかなかったり、他児に邪魔されたりすると悔しそうな表情をする。 行動 <ul style="list-style-type: none"> ・遊びを始めると、熱中する。 ・褒められると嬉しそうな表情になり、さらに頑張ろうとする。 ・遊びが上手くできると素直に喜びを表現する。

ケ ー ス B	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蹴ったボールを援助者と追いかけて、競争感覚を楽しんでいた。 ・魚釣りでは大きい魚は重たいため、「一緒にやろう」とトレーナーに協力を求めた。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初はボールを蹴って遊んでいた。 ・魚釣りに興味を持ったようで、しばらく遊んでいた。 ・音の鳴るマットに興味を持ち、何度もマットを踏んでいた。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慣れ親しんだトレーナーとは楽しそうに遊ぶが、初めて関わるトレーナーには人見知りしてうまくコミュニケーションがとれない。 ・自分の世界を作って遊んでいるときにトレーナーが介入すると不安そうな顔を見せた。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びに対して自分なりにルールを決めており、こだわりを持つ。 ・魚釣りで子供達が遊んでいるのに邪魔して魚を投げていた。 ・飽きるのが早い。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親しいトレーナーとは楽しそうに遊んでいる。 ・最後の片付けも援助者と一緒になって行っていた。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな遊びに興味を持ち、なんでも試してみる（面白ければ続け、そうでなければ他の遊びに移る） ・ボールを投げることや蹴ることが上手である。 ・競争をすると勝ちにこだわり、勝つと喜ぶ。
ケ ー ス C	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊んでいる途中に遊び道具が相手の顔にあたってしまう泣いてしまうと、きちんと謝ることができた。 ・他の子供が自分の遊んでいる物を無理に取ろうとすると、強く嫌がり、泣いてしまう。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊ぶ時に他児より先にしたがる。 ・遊ぶことが大好きで、よく笑い、表情が豊か。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嫌なことを嫌とはっきりと言う。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他児と一緒に遊ぶことが少ない。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次々に自分で遊ぶものを見つけ、一つの遊びに長い時間は遊ばない。 ・自分が遊んだ道具を持ったまま別の遊びに移り、道具を返してと言ってもなかなか返してくれない。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分がしてほしいこと（抱っこなど）が言った通りにならないと強く言葉で言う。 ・短い言葉を繰り返し、文章で話すことが難しい。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他の子供、学生がしていることを真似したがる。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな遊び道具が好きで、何かに乗って引っ張ってもらい移動する遊びが好き。 ・体を動かすことが好きで、走り回る。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の名前を平仮名で書くことができる。 ・表情豊かで、しゃべることが好きで、大きな声で笑い、泣く。
ケ ー ス D	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボウリングのピンを全部倒したことを周りにいるトレーナーに自慢していた。 ・的当て（ディスクゲッター）を、他の子供達とも一緒に遊んでいた。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フラットボールに興味を持って楽しそうに遊んでいた。 ・キャッチボール（ザーツ）を楽しんでいた。 ・ザーツが垂直に床に落ちるのを興味津々に見ていた。 ・他児に混ざって魚釣りをした。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びに夢中なせいもあるが、質問をしてみてもあまり返答はなかった。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飽きっぽい一面がある。 ・遊びが、次々に変わっていく。 ・一つの遊びを長くやることはあまりない。 ・色々な遊びに興味を持って、短い時間に次の遊びに移ることがあった。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・途中から他の子どもたちとも一緒に遊んでいた。 ・人見知りをしない。 ・他児と一緒に遊ぶことがあった。 ・他児の手をつないで遊びに誘う。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の興味のある遊びには積極的だった。 ・遊びが好きで、楽しんでいた。 ・活発で元気だった。 ・バットでボールを打つ等活発に遊んでいた。

ケ I ス E	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初はよそよそしかったが、すぐに打ち解ける。 ・他児とよく行動している。 ・「○○しよう」「○○に行こう」と言って一緒に遊ぼうとする。 ・他児に「○○貸して」と言われると「嫌だ」と言って嫌な顔をする。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次々に遊びを変える。 ・よく走り回り、次々に移動する。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「順番に遊ぼうね」と言うと、「いいよ」と言って貸した。 	<p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常に走り回り、長い間同じ場所にいることがない。 ・魚釣りの遊びをしていると、他児が遊んでいるにもかかわらず、すべての魚を拾い集めて持って行ってしまう。 ・一つのことに集中できず、すぐに他の遊びに移る。 ・使わないのに、一度にいろんな道具を取って集めてしまう。 ・常に落ち着きがない。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仲の良い子供がおり、常に一緒に遊んでいる。 ・積極的にコミュニケーションを取り、話していると笑顔も多い。 ・思わぬ行動をして他児を困らせることが多いが、他児を思いやって謝る。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明るく元気に遊んでいる。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・嬉しいこと、嫌なことは言葉や表情に表して伝える。
ケ I ス F	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シールをトレーナーに貼って反応を楽しんでいた。 ・ボールを投げてトレーナーと走って追っていく。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板に○を書いて「まる」と言うことを繰り返した。他の遊びに興味を持つが、暫くして黒板に戻り同じことを繰り返していた。 ・ストラックアウトで遊んだ。何度失敗しても頑張っていた。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トンネルを数往復し、トンネルを揺らしたり通せんぼをしたりすると笑顔で「いや」と言う。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象児と援助者が1対1で遊んでいるところに他の人（対象児や援助者）が介入することを嫌い、泣くこともあった。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人遊びが目立つ。 ・遊び道具がすぐ変わる。 ・さまざまな物に興味を示すが、飽きるのが早い。 ・遊びのなかで自分のルールを持ち、それへのこだわりが強い。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トレーナーに近寄ってくる。 ・最初は人見知りをする子供もいたが、遊び道具を見せて「一緒に遊ぼう!」と声かけするとすぐに慣れてくれた。 ・楽しそうに遊んでいる人を見ると、その輪の中に自分から入って一緒に遊んでいるのを見かけた。 ・抱っこやおんぶが大好き。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを投げたり蹴ったりするのが上手である。
ケ I ス G	<p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体育館の外に興味があるようで、何度も外に出たがっていた。 ・一度体育館の外に出て、スポーツセンター1階までの道のりを往復で散歩した。 ・バスケットボールの点数盤のスイッチを押して遊ぶのが楽しいようだった。 	<p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多動で一つの場所に留まっていることがない。 ・体育館の外に興味があつて、外に出たがることが何度かあった。 ・体育館の外では、きょろきょろと周りを見ながら歩いていて、段差に躓かないか心配だった。 <p>言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話しかけてみると時々おうむ返しで返してくれることもあるが、あまり言葉は喋らない。 	<p>対人</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何度か話しかけると、おうむ返しで反応を返してくれる。 <p>行動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テニスコートや図書館の建物、スポーツセンター内にある器具など色々なものに興味を示していた。 ・とても元気で、身体を動かすのが好きようだった。 ・自分の興味のあるものに対して笑顔で楽しそう。

ケ ー ス H	行動 <ul style="list-style-type: none"> ・口数は少ないが遊んでいる時は笑顔が見られる。 ・次々に自分で遊びを見つけて遊ぶ。 ・他の子供から自分の遊んでいた物を取られそうになると隠す。 ・途中から参加したためか、体育館に入ってからすぐは不安げだった。 言語 <ul style="list-style-type: none"> ・自分からあまり話すことはなかったが、こちらから質問するときちゃんと返事をする。 	対人 <ul style="list-style-type: none"> ・一つの道具で他児と一緒に遊ぶことが出来ない。 ・他児が遊んでいる物で遊びたがり、相手の手から取ろうとする。 行動 <ul style="list-style-type: none"> ・他児が遊んでいる場に他の道具を持ってきて、他児が遊ばなくなる。 ・一つの遊びが続かず、次々に自分で遊びを見つけていく。 言語 <ul style="list-style-type: none"> ・発語が難しいのか、文章で話すのではなく、短い単語を繰り返す。 	対人 <ul style="list-style-type: none"> ・道具の後片づけを進んで行い、他の人の手伝いもする。 行動 <ul style="list-style-type: none"> ・大きな遊び道具や音が鳴る遊び道具を好む。 ・成功するまで何回も挑戦する。 ・なかなか成功できないと、別の方法、同じ道具で別の遊び方を自分で見つけて遊ぶ。 ・声を出して笑い、体育館中を走り回る。
------------------	--	---	---

4. 考 察

発達障害児の運動教室において、対象児の年齢、障害種類や障害程度には差があるが、学生トレーナーは対象児が様々な運動遊びを自発的に楽しむように心がけながら支援をしている。また、対象児が興味を持った遊びに付き合い、対象児の状態によってはマンツーマンで対応する等、無理なく安全に運動遊びを楽しむことができるように配慮している。さらに、運動遊びへの関心を高め、コミュニケーション能力が向上するように積極的に褒めること、及び受容的な態度で接することを通して関わるようにしている。また、学生トレーナーを固定しないようにして、対象児が多くの学生と接することができるように図っている⁵⁾。

トレーナーを体験した学生における「よく接した子供の遊びの様子」、「障害特性と考えられるところ」、「子供らしいと考えられるところ」に関する記録の数はほぼ同じであった。運動教室では、対象児が自分の意思で運動種目を選択して遊ぶという、所謂自由遊びを重視している。このため、学生トレーナーが対象児の状態を広く捉えながら支援しているものと考えられる。

治療者には発達障害児が他者との関係性のなかで遊べるように、受容的な態度で接することが求められる。運動教室では、遊戯療法によるアプローチを取り入れ、対象児が興味・関心を抱く運動（遊び）を行うようにしているため、トレーナーは対象児に受容的に接することが容易になる。したがって、発達障害児の障害特性よりも人間性、言い換えれば子供らしさを感じとったり、捉えようとしたりしていると推察される。このため、自由な雰囲気の中で発達障害児と接する体験をすることは、障害の部分だけを強調して見ることから醸成される偏見を防ぐように作用する効果があると考えられる⁶⁾。さらに、学生トレーナーは「よく接した子供の遊びの様子」の対人に関しては、周囲の大人や子供との関わり、行動に関しては遊びの内容、及び言語に関しては話しかけに応じた発語を捉えようとしていると示唆された。

これらのことから、学生はトレーナーとして発達障害児の状態を全体的に捉えようとしているものと考えられる。

「障害特性と考えられるところ」の記述については行動に関することが多かった。特に、多動が目立つこと、注意が持続しないこと、こだわりがあること等、不適応行動についての記述が多かった。対人に関しては、周囲の大人や子供との関わりが少ない、言語に関しては、発語が少ない、おうむ返しがある等、

発語に問題があるとの記述であった。発達障害があると、その独特な障害特性のために、様々な変化をする周囲の状況や人間関係のあり様を瞬時に捉え判断する能力が不足することによって、集団のなかでは状況に応じた判断ができなくなることが多く、不適応行動が起こりやすくなる⁶⁾。このため、学生は受容的に接しながらも、発達障害児の障害特性から生じる行動を問題として捉えていると考えられる⁷⁾。

「よく接した子供の遊びの様子」については、記述の多い方から、行動に関すること、対人に関すること、言語に関することであった。行動に関しては遊びの内容、対人に関しては周囲の大人や子供との関わり、及び言語に関しては話しかけに応じた発語をすることについての記述であった。支援を必要とする子供は、感覚的な一人遊びが多い。遊べない子供が他者との関係性のなかで遊べるようになることが当面の目標で、見守り、寄り添い、かかわり合う「場」（プレイルームや教室等）の物理的環境をどう構成するか、及びその場や建物から自然に生まれる「自由で安全な雰囲気」が重要とされている⁸⁾。学生トレーナーは「子供らしいと考えられるところ」について、対人に関しては周囲の大人や子供との関わり、行動に関しては適応行動がとれている様子、言語に関しては言葉で意思や感情を伝えていることに注目していた。したがって、「自由で安全な雰囲気」の中で、対象児が適応行為をしている様子を観察していたものと捉えられる。

自閉症とコミュニケーションをとるときに、自閉症児が相手の発する言葉の意味をつかむことが困難な場合が多い理由として、言葉の文化に依拠した生活に十分入っていないことを示している。このため、自閉症の理解においては、感覚、情緒の分化を視野に置きながら関わる必要がある。構造化することは自閉症の認知を容易にしていくことに効果があるが、そこに他の人間との交流を主としなくなることを問題としなければならないと指摘されている⁹⁾。自閉症等の発達障害がある場合、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく必要がある。したがって、発達障害児の状態を参与観察により、「よく接した子供の遊びの様子」、「障害特性と考えられるところ」、及び「子供らしいと考えられるところ」の各視点から捉えることは、対象児を支援するために不可欠と考えられる。

5. 結 論

本研究において、ソーシャルワーク演習で発達障害児の運動教室のトレーナーとして参与観察を体験した学生は、発達障害児に対して、①遊びの様子、障害特性、子供らしい面の各視点から広く状態を捉えている。②状態を全体的に捉えようとしている。③自由で安全な雰囲気の中で適応行為をとっている様子を観察している。以上が考察された。

引用文献

- 1) 松山郁夫 軽度発達障害幼児期の不適応行動に対する保育士の認識 佐賀大学文化教育学部研究論文集11(1) 123-131 2006
- 2) 神野秀雄 発達支援を必要とする子どもたちの理解と実践トータル支援活動（実践支援セミナー資料） 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要 10 159-161 2009
- 3) 松山郁夫 発達障害のある子どもに関するソーシャルワーク演習 佐賀大学教育実践研究 27 133-143 2011
- 4) 松山郁夫・坂元康成・網谷綾香他 発達障害のある子どもを対象とした運動教室の取り組み 佐賀大学教育実践研究 26 201-213 2009
- 5) 同上3)
- 6) 同上3)
- 7) 松山郁夫 注意欠陥多動性障害のある幼児の不適応行動—保育所の保育士に対する意識調査を通して— 佐賀大学文化

教育学部研究論文集 13(2) 249-255 2009

8) 同上 2)

9) 石井哲夫 受容的交流理論覚え書 白梅学園短期大学教育・福祉センター研究年報 4 1-4 1999

謝 辞

本稿の作成において発達障害児の運動教室に関係されている皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。